

空間価値の啓発装置としての アートの可能性に関する研究

北口 直人¹・岡田 昌彰²

¹Gloval Micro Solutions (21250 Hawthorne Blvd.Suite 540 Torrance,CA 90503)

²正会員 博士(工学)近畿大学准教授 理工学部社会環境工学科 (〒577 8502東大阪市小若江3-4-1)

本研究は、土木遺産・旧南郷洗堰に対する周辺住民の価値認識を向上すべく、「ふれあいイベント」においてアートプロジェクトを実践し、その可能性を実証的に提唱した。旧南郷洗堰の系譜把握とともに、ランドアートなど既存のアートプロジェクトにおける風景の顕在化事例を整理し、実証作品制作の理論を確立した。アートプロジェクトを実践し、イベント当日に行った作品鑑賞者に対するアンケート結果から、作品設置によって得られる効果を把握し、アート作品の空間価値啓発装置としての可能性を提示した。

キーワード：旧南郷洗堰、土木遺産、アート、景観、価値啓発

1. 研究の背景と目的

近年、周辺住民または観光客に対して、土木遺産の価値認識を試みる取り組みが各地で行われている。価値認識とともに地域活性化をねらった地域イベントが行われ、その理解をさらに深めるためのシンポジウムなども各地で行なわれている。2000年には土木学会選奨土木遺産の制度も設立され、土木遺産に対する社会的価値を専門家のみならず一般の人々をも巻き込んだものになってきていることが伺え、

いっぽう、このような地域活性化や景観の顕在化手段の1つとして、アート作品が利用されるケースも少なくない。例えば、2000年夏に発足した「越後妻有アートトリエンナーレ」においてもアートによる地域活性化を目的とした取り組みが行なわれており、アートが土地と人をつなげ、地域住民と来場者をつなぐことが成果として挙げられている。

本研究では、滋賀県大津市の旧南郷洗堰において、沿川住民の組織する「旧南郷洗堰を保存する会」と国土交通省琵琶湖河川事務所が企画・運営した「ふれあいイベント」においてアート作品を制作・展示し、空間啓発における効果を計測しその可能性を実証的に提唱することを目的とする。

2. 旧南郷洗堰の系譜

(1) 竣工から廃止に至る経緯

1781年から洗堰設置に至る130年間に、+100cm以上の水害が2年に一度の割合で生じていた。湖面水位が

上昇し、沿湖の水田が長期にわたって滞水状態におかれ甚大な被害をもたらしていた。淀川の上流域にあたる琵琶湖の高水位を低下させるための瀬田川改修工事が行なわれ、洗堰の建設に至る。旧南郷洗堰は1905年3月に竣工し、以降瀬田川の排水能力は向上し洪水時における滞水期間も著しく短縮された。



図-1 現役当時の旧南郷洗堰 (土木学会所蔵)



図-2 旧南郷洗堰の現況 (筆者撮影)

後の1953年9月に生じた台風13号は淀川水系に著しい被害をもたらし、「淀川改修基本計画」の策定へと至る。1962年6月に新南郷洗堰が整備され旧洗堰は廃止のうえ大幅に改築され、現在は部分的に取り壊された状態で現存していた。

(2) 近年の価値づけの動き

その後旧南郷洗堰は放置状態にあったが、明治期最大の32連煉瓦・石造角落洗堰であり歴史的土木施設としての高い価値を有することが指摘され、2002年11月に土木学会選奨土木遺産に認定されている。

近年は後述のように旧南郷洗堰の地域的認識や親近感を向上させるためのイベントなども催され、地域資産としての価値が着目されている。

このように、旧南郷洗堰に対する近年の取り組みはいわばアクションの実施によって既存対象の価値を来訪者や市民に啓発する動きとして捉えられる。2006年から1年間実施された「国土交通省旧瀬田川南郷洗堰保存検討WS」においては2006年11月18日に「ふれあいイベント」が開催され、地元市民による角落とし体験やウォークラリー、クイズ大会や和太鼓演奏などが開催された。これはいずれも既存対象には極力改変を加えず、文字通り「ふれあい」を通して対象への親近感や関心を誘発させようという取り組みと言える。

3. 風景の顕在化装置としてのアート

本稿では、上記のような“対象への関心誘発”のうち1つの装置として、アート作品に着目した。特に1960年代に台頭する“ランドアート”は、環境に対する緩やかな働きかけを通じて、その美的価値を炙り出す手法を提示している。いわば、自動化した既存環境を顕在化、あるいは“異化”する方法として位置づけられよう。

ランドアートに関わる多くのアーティストは、風景そのものの中へと入り込み創作を行っている。単に風景を題材とするのみならず、風景自体をアートに昇華している。ここでは作品と風景との対峙によって、環境に固有の特質を付与することとなる。

既存のランドアートにおける景観異化の手法を整理した既存研究¹⁾があるが、本プロジェクトでは特に以下の4項目に着目した。

(1) フレーミング

鉄や木などのフレームによって風景や空間を枠取り、周囲とむりやり切り離す手法である。リチャード・ロングの『イングランド』(図-3)等に見られるこの枠取り手法は、枠により切り取った風景の特化を意味している。

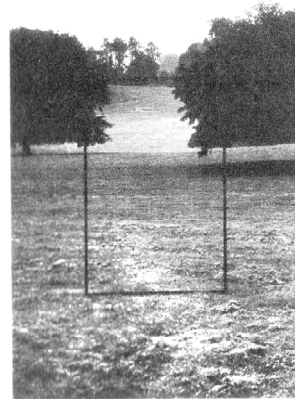


図 3 リチャード・ロング「イングランド」1967年²⁾

(2) 二元対峙

ランドアートは、「自然(既存環境)ー人工(アート作品)」といった異形態を対峙させ、既存の自然環境を顕在化させるものがある。マイケル・ハイザーの『Adjacent, Against, Upon』(図4)においては、「背景の自然美VS人工構造物」「自然石VS人為的コンポジション」「自然石VS人工的な直方体のコンクリート台座」という三段階の二元対峙が意図されている^{3) 4)}。



図 4 マイケル・ハイザー, Adjacent, Against, Upon 1976年(筆者撮影)

(3) 一過性

クリストの梱包芸術などランドアートには「展示期間限定」「季節限定」の作品が多く、この結果作品自体の存在感覚が希薄化するが、いっぽうで作品撤去後には元の日常風景が強く再認識されることとなる。

(4) 参加促進

ランドアートの中でも特に作品内に鑑賞者が入り込むよう意図された作品においては、鑑賞者が直接それを体感することによって“場所への認識”を深める手法が取られている。例えば、トビアス・ベルガー『フィヒテ(図5)』は、本棚、椅子、ベンチのほか、木々から吊るされる照明器具など周辺と異なったコンテクストが森林に投入されている。これによって、既存の

環境に実際身を置き、作品への“参加”が助長されることとなる⁶⁾。



図5 トビアス・ベルガー「フィヒテ」2003年⁶⁾

4. アート作品「視座ボックス」の制作・展示による空間啓発の試み

3章で整理した“既存環境の啓発装置”としてのアートの可能性に着目し、本プロジェクトでは「視座ボックス」と名づけられたアート作品を制作し大津市南郷地区の「ふれあいイベント」現地に展示することにより、場を活性化させ、結果として堰の再認識を誘発することを試みた。

(1) 作品の形態



図6 曲線的(左)及び直線的(右)な形態投入のシミュレーション

河川の水辺、山のスカイラインといった自然環境の卓越する当該地区に対し、これとは対照的な幾何学形態をもつ作品を挿入することによって、風景の顕在化を試みた。図6のようなシミュレーションを行い、背景となっている山や瀬田川のオーガニックラインに対する対峙効果を強調する幾何学的形態として直線的幾何学形態を採用し、作品の外観を立方体とすることとした。

さらに、堰の風景を「フレーミング」することによって周辺のコンテキストを切り離し、対象を特化して観察するような装置としての機能を意図し、筒状のボックスとした。

(2) 配置

フレーミングによる効果を可能とする配置を検討し、

図8のような位置への設置許可を得た。小段から約50mのひきを水面越しに眺められ、堰の枠取りは十分可能であることが結論づけられた。

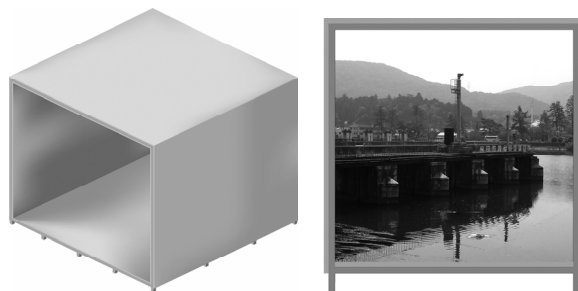


図7 筒状のフレームボックスの構想イメージ

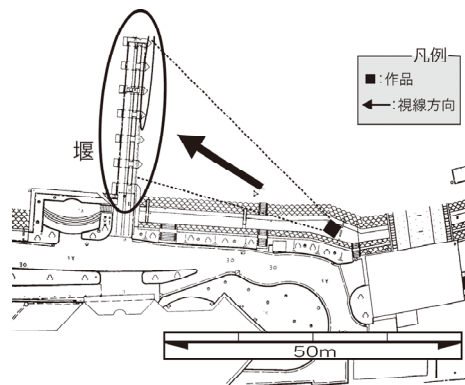


図8 作品配置図

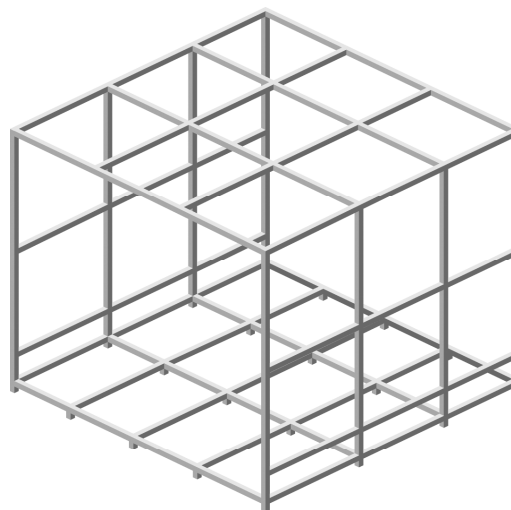
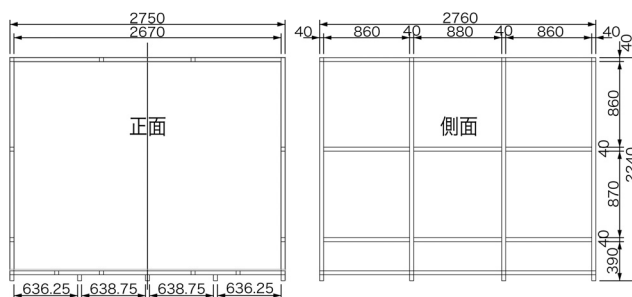


図9 SS40の角パイプによる設計

(3) 材料と構造

参加促進を意図するため、作品に十分な居住性をもたすべく、材質SS40の角パイプを用い図9のような1辺2750mmの枠組みを設計した。これを4つのパーツとして分解し、木製パネルとともにそれらを接続する部材を運搬し、現地にて組み立てた。

(4) ボックス空間内の演出

フレーミング効果を意図した作品に、更なる効果をもたせるためにボックス空間内の演出を検討した。鑑賞者に作品空間内に入ってもらい、その内部への滞留を通して堰の景観およびその存在への再認識を促進することを試みた。

周辺住民に対する旧洗堰のこれまでの役割は、安全かつ快適な“日常生活”の実現にあった。現在でこそその役割を日常生活の中で認識することは非常に困難であるが、ここでは設えられた“日常生活コンテキスト”の中から堰を見直すことで、来訪者に“堰によってもたらされた日常生活”というコンテキストから改めてその存在意義を再認識/再発見してもらうことを試みた。すなわち、単純に堰を「眺める環境」を用意したこととなる。作品空間内を生活空間のしつらえ、とすることにより、人と堰の関係を体感することにも成り得る。『室内/室外』という「二元対峙」と、「日常生活コンテキスト」という「コンテキスト置換」により、風景を顕在化することを試みた。

これによって、フレーミング越しに眺めた枠内風景は、堰と生活風景をコラージュした1枚絵となり、理



図10 日常的コンテキストの導入

人と堰の関係を再構築することを試みている。

(5) 絵画による空間演出の向上

さらに、作品空間への滞留を通じた“参加”をさらに促進すべく、空間内の壁面に壁紙となる絵（筆者による）を描くこととした。立方体の幾何学的形態とは対照的な自然の樹木をモチーフとした絵画とし、空間滞在中の刺激のひとつになると考えた。なお、堰風景を見る環境という空間の定義を壊さぬよう、絵画はあくまで空間の背景的要素となるよう、注意を払っている。



図11 壁画



図12 作品「視座ボックス」の設置

5. 作品設置の効果

当該地において「ふれあいイベント」の開催時間に合わせ、2006年11月18日の朝9時より午後4時まで作品を展示し、来訪者に対し作品内にてアンケートを実施した。作品を体験してもらいながらアンケートに回答する形式となっている。回収データは14件であった。

表1 年齢層

	20代	30代	40代	50代	60代
回答者数	3	2	3	3	3

得られた主な意見は以下のようなものであった。

(1) 既存の旧南郷洗堰の良さ

水辺の暮らしを守る大切さや歴史、「昔からの親しみ」といった地域における意味を指摘するものがあったほか、「周辺の四季の移り変わり」「レンガと石の質感やカタチ」といった外観を評価するものがあった。

(2) 作品を通して強調される堰の性格

「新たな視線の位置（低視点高さ）」「絵葉書のような風景」といったフレーミング効果そのものを評価するものがあったほか、「人との関わり」「生活を守る大切な役割」といった意味内容を評価するものも見られた。また、「堰がまるで違うもののように見える」といった新たな視座の生成を指摘するものもあった。

(3) 作品の特徴

斬新さや絵画・作品の完成度の高さを指摘しただけのほか、「新しい雰囲気」「旧南郷洗堰での室内空間という不思議さ」「木々（の絵画）に囲まれることの温かみ」「静寂の強調」「水と木々の調和、自然の風」といった新たな価値の生成を指摘するものも見られた。いっぽう、存在のわかりにくさや空間の窮屈さといった課題も指摘された。

(4) まとめ

以上より、作品展示の効果として以下のような可能性が指摘できる。

- a) 来訪者による新たな風景価値の認識
- b) 新たな視座の導入による既存風景の活性化
- c) 自然環境のもつ風韻の再認識
- d) 対象の意味探求の誘発

6. 結論

サイトに対するアート利用は、作品自体の表現のみならず、サイトが潜在的にもつ魅力を引き出し、日常に埋没した風景を顕在化することがわかった。また、作品鑑賞のみならず作品自体に直接参加してもらうことにより、場所と人とを結びつけ場の意味を再考する契機ともなりうる。アートの導入によって場所を活性化させ、空間価値の再発見／利活用を誘発する啓発装置としての可能性を示唆した。

【参考文献】

- 1) 岡田昌彰(2003)「テクノスケープ～同化と異化の景観論」鹿島出版会, 2003年
- 2) リチャード ロング(1996)「リチャード・ロングー山行水行」淡交社
- 3) ジョン・バーズレイ(1993)「アースワークの地平」鹿島出版会
- 4) Elizabeth C. Baker (1983) "Artworks in the Land",

Art in the Land, E.P. Dutton Inc.

5) 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2003」大地の芸術祭・花の道実行委員会/編集 現代企画室 2004年

6) 「ランドアートと環境アート」ブライアン・ウォリス/概説 ジェフリー・カストナ/編集 ファイドン株式会社 2005年